

# あなご

- 学生たちの「街道をゆく」 -



滋賀県

成安造形大学 [ ]

beyond  
2020



© 2019 滋賀県（平成 30 年度 滋賀県 近江文化発信・発信事業）

# あわじ

- 学生たちの「街道をゆく」 -

## 目次

### 3 はっけん！近江文化プロジェクト

はっけん！①フィールドワーク

はっけん！②古写真検証

はっけん！③ワークショップ

### 9 特集 はっけん！近江の魅力ってなーに？



「街道からみる文化」岩佐南実



「びわ湖の魚と私たち」井上実奈美



「石のある街並み」今村空歌



「水と生きる暮らし」富田真央

### 19 はっしん！近江の魅力

東京で「はっしん！」はっけん！学生が語る滋賀・近江の魅力

私たちの「気づき」を一緒に体験！はっけん！近江文化 MAP 塩見蒼矢



まだまだいっぱい！はっしん！近江文化 加藤あゆ・竹間優大  
Instagram / facebook / Twitter / YouTube

「街道をゆく」などの作品を残した司馬遼太郎さんは、作中で滋賀県（近江）の土地や人物を数多く取り上げ、「このあわあわとした国名を口ずさむだけでもう、詩がはじまっているほど、この国が好きである」と近江への気持ちを表現しています。

近江では東海道や中山道など多くの街道の交わりや、びわ湖の存在などからさまざまな文化が誕生しました。

司馬さんが好きだった近江にはどんな魅力があるのか。

本冊子では、成安造形大学の学生たちが、フィールドワークやワークショップなどの活動をおして独自の視点で近江の魅力を「はっけん！」「はっしん！」します。

# はっけん! 近江文化プロジェクト

司馬さんの文献から近江の魅力を発見・発信することを目的に、滋賀県（近江）の土地や文化を調査していくプロジェクトです。

私たちが今回取り上げたのは「街道をゆく」の1巻「湖西のみち」と、16巻「叡山の諸道」の2冊。司馬さんは全43巻の紀行集のなかで何度も近江に足を運び、「近江から始めましょう」と、はじまりを大好きな近江に定め、その文化や歴史に敬意を示してこられました。

司馬さんと同じく、私たちの調査も湖西からスタートします。

近江の魅力に迫るプロジェクトのメンバーは、大学入学とともに滋賀県に縁ができた私たち7名の芸大生。

司馬さんが好きだった近江の魅力を、学生ならではの「視点」と、他府県出身者だからこそ「気づき」で発見・発信していきます。

このプロジェクトでは「はっけん！」する活動として、「街道をゆく」に出てくる土地のフィールドワーク、司馬さんが湖西を歩いた当時の写真を収集するワークショップ、その写真の景色がどのように変化しているかを調べる古写真検証を行っています。

「はっけん！」の活動では、日々の活動や調査した内容を各種SNSや動画、地図、冊子で発表しています。

**かわいい紳士**  
1 映像  
2 大阪府  
3 マップアイコンデザイン/動画ページ  
4 写真と映像、撮るのも見るのも大好きです

**変な歌姫**  
1 デザインプロデュース  
2 福井県  
3 アートディレクション/特集ページ  
4 デザインを学んでいます  
楽しい企画を考えたい

**しっかりお嬢坊さん**  
1 グラフィックデザイン  
2 京都府  
3 ロゴデザイン/  
特集ページ  
4 子どもの遊びや  
ワークショップに  
興味があります

**イマドキ番長**  
1 グラフィックデザイン  
2 富山県  
3 イラスト/特集ページ  
4 WEBデザインを学んでいます  
イラストも書きます!

**ほほえみ不思議ボーイ**  
1 映像  
2 兵庫県  
3 地図ページ  
4 イベント運営や  
会場デザインに  
興味があります

**布ぞとかわいい**  
1 情報デザイン  
2 長野県  
3 SNSページ  
4 新しいことに挑戦する  
ことが好きです

**荷物多い子ちゃん**  
1 グラフィックデザイン  
2 大阪府  
3 アートディレクション/特集ページ  
4 ワークショップなどの  
コミュニティデザインに  
興味があります

**メンバー紹介**  
1 学んでいること  
2 出身  
3 冊子内の担当  
4 ひとこと

**竹間優大**  
**山石佐南実**  
**井上実奈美**  
**今村空歌**  
**加藤あゆ**  
**富田真央**  
**塩見蒼矢**

『街道をゆく』の聖地巡礼！

1巻「湖西のみち」と16巻「叡山の諸道」に登場する湖西エリアの土地や景色を巡り、司馬さんがなにを見て、なにを感じていたのかを探りました。

司馬さんが「湖西のみち」で近江を歩いたのが今からおよそ50年前にも関わらず、湖西では司馬さんが書かれた景色や建物が多く残っており、さまざまな「気づき」がありました。



フィールドワークの詳しい様子は  
各種SNSに掲載中！  
P23へGO!

地元の先生に、司馬さんが来られた  
当時のことを聞かせてもらえました。

10月14日



10月21日



11月7日



12月16日

司馬さんが湖西を舞台に『街道をゆく』を書かれた、1970年～1980年ごろの写真を大津市歴史博物館や地元の方々からお借りし、現在の風景とどのように変わり、なにが残っているのかを調べました。

古写真  
ズピクリ  
エピソード

古写真を収集してから、はじめて行く場所もありました。

柳が崎港から、周遊船ミシガンに乗り、大津港へ着いてビックリ！古写真では、大津港と駅舎が隣接していたのに、現在港の前は、緑の公園でした。

実際には、埋め立てで大津港が沖に移動していたのです。あると思っていた駅が見当たらず、ここはどこ！?となり、未来にタイムスリップしたようでした。



現在は公園となっています。

はっけん！  
古写真  
検証 ②

「毎朝、びわ湖では魚をつかまえる。」というよりもそこにあるものをとっていた  
自給自足の自然とともに生きる暮らしがあった」



「発展するのはうれしいけど、美しい景観は守っていききたいな  
盛り上がってる場所もあるけど、たくさんの方は来て欲しくないかな〜」



「ほかのところに住んでいた時期もあるけど、やっぱり北小松がよい  
なににも変えられない、山と水が美しい場所！」

『街道をゆく』で最初に登場するのが、大津市最北部（当時の滋賀郡  
志賀町）にある北小松という漁村です。

司馬さんは「こういう漁村が故郷であったならばどんなに懐かしい  
だろう」と北小松を語ります。

故郷であったらと思った当時の情景を探るべく、北小松自治会に  
協力していただき、住民の方から当時の写真をお借りし、お話を伺  
いながら、地図上に当時の景色を並べていきました。



「何年前か、TV局が司馬さんのドキュメンタリーの  
撮影に来たとき、街を案内した！  
船に乗って漁師として出演したわ〜」

当時の北小松は漁師の町という印象が強く、  
お嫁に来て食に困らない、  
少し怖い（漁師の荒々しさ）といったイメージを  
もたれていたそう。

「北小松には穏やかな時間が流れてる」

古写真をみて、「これ俺や  
でー」「若っかいな〜」「懐  
かしいー」と大いに盛り上が  
り、思い出話に花が咲いて置  
いていかれる場面も！皆さんの  
仲の良さが伝わってきました。  
北小松には5つの集落があ  
り、そのつながりは深く、2  
年に1回のペースで日帰り旅  
行にも行くのだそうです！  
「北小松はどんなところです  
か？」と聞くと、自然が豊か  
だという声が多くあがしまし  
た。  
山と湖に囲まれた自然豊か  
な北小松では、夏は農業、冬  
は漁業と、仕事が季節ごとに  
違ったそうです。北小松は自  
然の全てを生活の糧とし、恩  
恵を受けてきた町でした。

本冊子の表紙は、北小松で  
撮影しました。ワークショップ  
を行なった北小松公民館の  
すぐそばの湖畔です。ここで  
びわ湖を眺めながら皆でお弁  
当を食べたり、少し肌寒いな  
か、湖に入ったりもしました。  
とても心地よく、ゆったりと  
した空気が流れる場所で、メ  
ンバーのお気に入りスポット  
になりました。  
地元の方は、この場所を「大  
津から湖岸を北上して北小松  
に乗ると、一気に視界がひら  
けてびわ湖が一望できるか  
ら、自転車乗りやバイクの人  
がここで休んでいくんだよ。  
さっさと司馬さんもここから  
景色に、ふと足を止めたん  
じゃないかなあ？」とうれし  
そうに話していました。  
北小松に生きる人々の心の  
なかに、自然豊かな美しい  
景色を守っていきたいという  
気持ちも今も変わらずに残っ  
ています。



「今の若い人は、浜大津（大津市街）や京都へ  
仕事に行く人がほとんど」

「江若鉄道がなくなって、JR湖西線ができるまではバスを  
使ってたけど不便だから、皆この時期に車を買ったわ」

# はっけん! 近江の魅力ってなーに？

フィールドワークやワークショップなどの活動をとおして、多くの「気づき」がありました。

近江の風土や人々の営みから生まれたさまざまな文化は、普段何気なく通り過ぎていた景色のなかにたくさん潜んでいました。

新たな大発見をしたわけではないですが、メンバーそれぞれが興味を持ったことを調査し特集を組みました。多くの方に近江の魅力を知ってもらい、

新たな「はっけん！」を見つけていただければ幸いです。

「街道からみる文化」 岩佐南実

「びわ湖の魚と私たち」 井上実奈美

「石のある街並み」 今村空歌

「水と生きる暮らし」 富田真央



大津絵の店  
〒520-0034  
滋賀県大津市三井寺町3-39  
TEL 077-524-5656



### 大津絵の店の今むかし /

大津絵の店は町家の通りで、今のショーウィンドウのところが畳敷きの作業場になっていたんです。客引きとして外から見えるように作業していました。



高橋松山(信介)  
江戸時代より続く大津絵の店で5代目として技術を受け継ぎ、現代の大津絵師。

1998年より5代目として活動  
2019年フランスでの展覧会が予定されている。



## 街道文化 岩佐南実

近江は街道が多く、たくさん文化が発展しました。江戸時代の旅人たちの旅の目的といえは本山参りです。江戸からみて、京都の一つ手前である近江には東海道最大の宿場町があり多くの旅人で賑わっていました。旅のお土産として、近江の土産品を買って帰る人も多かったようです。

そのなかで発展した近江のお土産文化があります。大津宿では、大津絵やそろばん、大津針などが人気のお土産品でした。しかし、今でも残っているものは大津絵だけです。なぜ、大津絵は長い間受け継がれてきたのか。

「街道はなるほど空間的存在ではあるが、しかしひろがえって考えれば、それは決定的に時間的存在であって、私の乗っている車は、過去というほう大な時間の世界へ旅立っているのだから」と述べています。私は、この考え方に興味をもって大津絵を見

てみることにしました。

#### 民芸品

郷土の工芸品として  
価値再発見



美が宿っている

やなぎむねよし  
柳宗悦

低価格

#### 大衆画

武者絵など



鬼の憑念仏

美人画など



藤娘

#### 仏画



江戸



### 大津絵の店

#### 5代目 高橋松山さんに聞いてみた

#### 宗教画から大衆画へ

岩 大津絵の歴史を教えてください！  
松 大津絵のはじまりは美術品に近いです。京都の本願寺の周りにたくさんいた仏画師が山科のほうへ流れて行ったのがはじめです。安く大衆が買えるように仏画を簡略したものを作り始め、それが大津絵に発展していきました。

岩 元々は京都から流れてきた仏画だったのですか。  
松 江戸時代には東海道のお土産として大津絵は全国に広がります。歴史的にはキリシタン弾圧のころで、「自分は仏教徒だ」という証拠に仏画を庶民が持つことが流行したんです。

岩 街道ができたことで旅人が増え、お土産の需要が上がった時期と仏画の流行の時期がちよと重なったのか！  
松 関西を中心とした元禄文化ではお芝居などが流行して、もっとおもしろいものをお土産に描くようになってきました。このころだと、浮世絵より大津絵の方が人気があったくらいです。関西のスタイルではバツと見てわかりやすい鬼や動物を登場させるユーモラスで風刺が効いた絵が好まれました。

岩 「鬼の憑念仏」など代表的な絵柄は仏画のあとにできたのですか。  
松 明治時代になると、西洋文化が入ってきたり戦争の影響で大津絵の話題は減っていますが、昭和40年

#### 海外へ

代から50年代にかけて民芸ブームが起こり、大津絵も滋賀県の民芸品という扱いでメディアに取り上げられた時代もありました。

岩 大津絵は今、海外で注目されていますよね？  
松 海外の方は前段階がないから「日本は古くからこんなものを描いていたのか」と興味をもってくれますね。今度、フランスで大津絵の展示がありますが、そういう視点で単なる民芸品ではなくもう一度、日本の大衆美術の絵画としてのおもしろさを掘り返してもらえたら大津絵の良さも変わるかなと思います。

岩 新しい大津絵の風が日本にも吹いてきそう！  
松 大津絵は「大津」とついている小さな地方の工芸というイメージを持たれることが多いです。でも、大津絵の画題にはローカルな絵柄はなく、日本全国どこの人にも通じる絵を描こうとしていたところが大津絵の特徴です。

岩 私も最初は「大津」という限定された地域の文化なのだと思うんですが、日本の文化だったのですか。  
松 日本人なら誰でも理解できることを根拠にしていたから、そこをもう一回磨かされたんです。大きく日本の古い文化として本来はあるんだという認識になるといいと思いますね。

司馬さんが街道を、「空間的存在」だけでなく、「時間的存在」とも表現されているように、大津絵の辿ってきた時間的な変化、この歴史が現代を生きる私たちだけが感じることでできる大津絵のおもしろさだと思います。大津絵が元々もつ絵としてのおもしろさと歴史のおもしろさがあった、日本から海外へという、空間的な広がりを見せるまでに発展したのだと思います。





# びわ湖の魚と私たち

井上実奈美

「街道をゆく」の始まりは、北小松からでした。私の魚への関心の始まりも、北小松からです。

初めて北小松を訪れたとき、最初に向かったのが漁港です。

そこにはボツボツと船が並び、釣り人は静かに湖に向き合っていて、私の想像していたような漁港ではなく、少し寂しげな印象でした。

「街道をゆく」では、司馬さんが漁師さんに漁に出ていた船の数について何うシーンがありました。その問いかけに対して漁師さんは、減ってしまった船の数を寂しげに、そして憎むように答えます。現在、北小松で漁を行なっている船の数は、二艘のみだそうです。

北小松で行なったワークショップで、びわ湖の魚についてたくさんの方が話題にあがりました。しかし、それは面白い話だけではなく、魚が減っていることが人間のせいであるということなど、暗い話もありました。

近年びわ湖は、地球温暖化が進んでいることや、人間の手によって干拓され、魚たちの産卵場所が少なくなったことなど、さまざまな原因によって、魚たちが暮らしていく場所になってきています。

かつてのびわ湖は、魚たちが多く棲み、人間と魚との関係が密にありました。そして、近江には、魚と人との関わりの中で、近江だからこそ生まれた文化があります。



近江は、お米作りが盛んです。高温多雨な夏の気候、山々に囲まれた地形、そしてなんといってもびわ湖に流れ込む豊富な水資源によって、美しい田園風景が広がっています。春になると、魚たちがびわ湖から水田に遡上してきます。温かな田んぼは栄養豊富なプランクトンを含んでいて、卵は稲穂の中で天敵の鷹から姿を隠すことができたので、産卵場所としてぴったりでした。安全で快適な、「魚のゆりかご」として重要な場所だったのです。

## 交流の場

内湖・ため池・水路や河川は、湖岸から離れて暮らす人々にとっての魚との交流の場でした。魚とりや魚つりをする、人と魚との暮らしがありました。稚魚が育つ場所であり、水田と同じく産卵場所にもなっています。人間だけでなく、魚にとっても非常に大切な役割をしているのです。

来てくれる魚を待つ、自然な流れのままに魚をとってんだ！仕掛けの方法もたくさんあるんだって！

人々は、農作業をするなかで、自然に集まってくる魚をおかずとしてつかまえていました。仕掛け網を設置し、魚が田んぼに来るのを待つ、そんな「待ちの漁法」が近江では伝統漁法として、今も息づいています。



## 文化

珍味として有名な「ふなずし」。元々傷みやすい湖魚を発酵の力で長期保存する方法で、昔の人の知恵から生まれました。田んぼのなかで共に育った「仲間」とも言える米と魚が、人間の手に渡ってもなお融合し、人々の食を豊かにしてきました。



# 子どもと魚

ワークショップを行なったとき、北小松の方の子どもの頃の魚との関わりについて聞くことができました。



## 「昔は遊ぶといえば川！」

安曇川では、ゴリ上りの時期に岩と岩の間に網をかけてつかまえていた



動きが面白い、ふっくりほっぺの、とても小さなゴリ。昔は家庭でよく食べられていましたが、現在は漁獲量が減り、高級魚に。釜揚げにしたり、佃煮として食べます。



とてもうれしそうに話してくれたことが印象に残っています。自分でつかまえた魚を食べるって、どんなに美味しいんだろう…

## 「遡上してくるビワマスを川にとりにいって、それを塩焼きにして弁当に入れてもらうことがあった

いつもご飯と梅干しだけやったけど、ビワマスが入ってたときは、ほんまにうれしかったな〜



一番好きなびわ湖の魚は？と聞くと多くあがったのがビワマス！10月の大雨の時期に川へ遡上してくるから、アメノウオ（雨の魚）とも呼ばれています。サケ科ですが、サーモンとは違う美味しさがあり、脂っこくなくあっさりとした味わいです！



現在びわ湖では、そういった魚とのふれあいが、湖魚を食べる会<sup>うま</sup>の開催や、魚のゆりかご<sup>うま</sup>水田<sup>うま</sup>を取り戻す取組みなどの、人々の活動によって戻って来ています。びわ湖の水を共有し、ともに生きる魚。あまり食べる機会がないと思いますが、近江には湖魚を使った伝統食が多く残っており、味わい方もとても豊富です。びわ湖の魚を食べ、私たちと魚との関わり、そして近江の文化を感じてみてはいかがでしょうか。

「私が魚について質問すると、福水さんは、『このせまい水路は、鮒などの通りみちなんです』と、友達のことをいうように答えてくれた。」

「街道をゆく」24巻の中で司馬さんが、びわ湖の湖東に位置する近江八幡を訪れ、船に乗って水路を進んでゆくとあります。船に乗せてくれた、近江八幡で鮒を作っている方との会話を、司馬さんはこのように書かれています。

戦後の日本は食糧危機により、農地を増やします。内湖が干拓され、人と魚が接する機会は少なくなりました。







# 石のある街並み

最初のフィールドワークの場所は石垣のある門前町として有名な坂本でした。そこで私が最初に興味をもったのが「穴太衆積み」と呼ばれる石垣。「坂本の町にあっては石垣の美しさを堪能すべきだが、さらにはこの技術の伝統を背負った近江の穴太衆への敬意をわすれるべきではない。」

見た目の美しさだけでなく、司馬さんが敬意を忘れるべきではないとまていう技術とはどのようなものなのか気になり調べることになりました。



## 穴太衆積みって？

平安期を通じて比叡山では建築物の造営が盛んだったため石垣技術が、とても発達しました。その際、比叡山のふもとの「穴太」の地に土木工事や石工を得意とするような技術者達が多く集まり、そのなかで「穴太衆」という独特の技術集団が形成されたそうです。その穴太衆が積んだ石垣が「穴太衆積み」。彼らは織田信長に高い技術を買われ安土城の築城に起用されました。それをきっかけに全国の石垣構築に携わるようになったようです。

## 穴太衆が関わったとされる城



## 「穴太衆積み」以前に石垣の種類って知ってる？



穴太衆積みは自然石をそのまま(加工せずに)積み上げる野面積み、では積み上げ方による種類分けは、なにに当てはまるのでしょうか？

## 私が「ぶんせき」する穴太衆積み

一般的に乱積みは大小の差があまりない石がさまざまな方向に組み合わせて積み上げられており、「石の形に合わせて積み上げていきまし」というような印象があります。

それに対して穴太衆積みは石の大小の差が大きく、基本となる大きい石はきちんと水平に積み上げられていきます。しかし、布積みのように石の目が通ると強度が弱くなるのでそうならないように間石や小詰め石で規則を崩しているという感じがします。

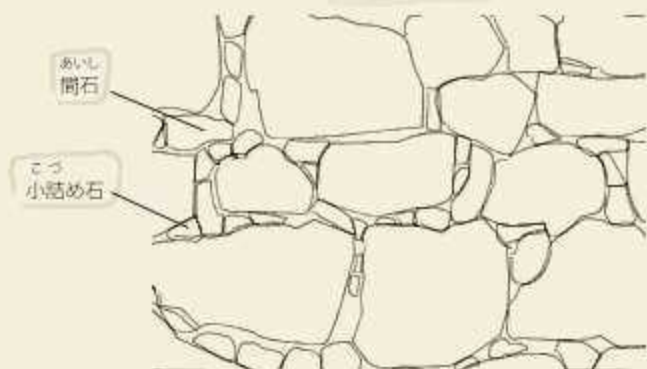
つまり穴太衆積みは布積みと乱積みがいいとこ取りの積み方なのではないでしょうか。穴太衆積みと不安定感の共存した感じはそれが理由なのではないかと考えました。

## 乱積み



平石をさまざまな方向に組み合わせ積み上げる方法

## 穴太衆積み



あいし 間石  
こづ 小詰め石

## 布積み



目が横に通るように積み上げる方法

ここまで石垣の種類についてみてきましたが、実物を確かめたくてうずうずしてきませんか？  
まだまだ穴太衆積みには強さのための工夫がたくさんありますが、まずは、実際に足を運んでどんなものなのか確かめてみてください！

今回、さまざまな石垣と穴太衆積みと比較することで、穴太衆積みと石垣のなかでも特別な存在であり、分類には収まらない「穴太衆積み」という枠を勝ち取っている理由がわかりました。まだまだ穴太衆の石積み技術はたくさんあり載せきれなかったのが残念ですが、調べるほどに奥深い穴太衆積み。ここまで石垣を洗練し、極め、受け継いだ穴太衆に、司馬さんが敬意を払う理由もよくわかりました。  
今後、穴太衆積みを見れば、見た目の美しさはもちろん、これまでの穴太衆の努力の結晶であるという、また違った美しさを感じるでしょう。





# 水と生きろ 暮らし

富田真央



かわととかばたの  
水はよし

針江ではこの洗い場を「川端」と呼び、  
年中13℃前後で湧く水を「生水」と  
呼んでいます。

「かばた」では湧き出る「生水」が  
町を流れる水路とつながっていて、魚  
が飼われています。

針江の人は、鍋や食器・野菜など  
を「かばた」で洗い、飼われている魚  
が（主に鯉）野菜のくずや米粒などを  
食べてくれるので水を汚すことはありません。

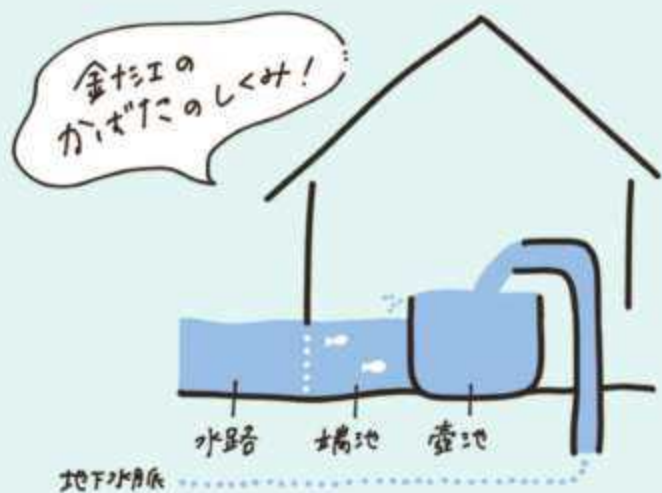
魚たちによって浄化された水は水路  
の流れに沿って、次の「かばた」に  
向かっていきます。

針江で暮らす人たちは水を汚さない  
ために、お互いを思いやりながら生活  
をしています。



水脈の深さで  
味が変わるのだとか...!!

生水は比良山系の伏流水が水脈を伝って湧き出てきます。生水はまず壺池に溜まり、溢れた水は次の端池に落ち、水路に流れていきます。食器の汚れなどは端池で飼われている魚たちが食べます。



針江のかばたのしくみ!

「街道をゆく」では、北小松に訪れた際「波うちぎわで老婦人が葉を浸け、左右に振りあいながらあらっているのを見て」と、びわ湖の水で大根菜を洗う老婦人の話があります。

北小松や朽木にはじめて訪れたとき、いろいろなところに「水路」があることに気がつきました。

特に気になったのは「かわと」と呼ばれる洗い場です。この「かわと」では野菜を洗ったり、洗濯や血洗いをしていたそうです。

私の実家にも「かわと」があります。富山にいたころは名前も知らず、暮らしの一部として存在し、畑で採れた野菜の土を落としたりするために利用していました。北小松でそれが「かわと」と呼ばれていると知り、実家との共通点から興味が湧きました。

北小松ではかつて「かわと」を利用し生活していたそうですが、現在使用している人はほとんどいません。しかしそれとよく似たものを今も変わらず利用している地域が近江には残っていました。

なかでも、高島市針江地区や東近江市の五箇荘町が有名で、私は針江の「生水の郷」へ足を延ばしました。

針江のかばたを見学するには  
事前申し込みが必要!!  
詳細はwebで!!



これが「かわと」!!



司馬さんの「日本人への道言」には、  
当時の武村滋賀県知事との対談が書か  
れていて、びわ湖がどれほど大切な存  
在なのかを語っています。

大阪や京都の貴重な水源として上流  
の立場である近江は、今日までびわ湖  
を守り続けてきました。司馬さんは作  
中で「水を守ってくださいありがとうございます」と、近江に感謝をしています。

びわ湖は当たり前前に存在しているわ  
けではなく、綺麗な状態を保ち続ける  
ために近江の人たちの努力や知恵で守  
られてきました。それは近江にとつて  
誇れることであり、私も同じように守  
り続けていきたいと思いました。

針江 生水の郷

高島市高島町針江 372  
TEL 0740-25-2506  
Mail shizuka@nagasaki-honda.or.jp  
Web nagasaki-honda.or.jp

# はっ 近江のん 魅力 力

知れば知るほどおもしろくなっていく近江の魅力や文化！  
できるだけ多くの方に知ってもらいたいと、  
さまざまな方法で「はっしん！」しています。

フィールドワークやワークショップなどの活動を、  
SNSやWebマップ、動画などのメディアで紹介しています。  
冊子では伝えきれなかった「はっけん！」がまだまだあります。



私たちの「気づき」を一緒に体験！  
はっけん！近江文化MAP

特集ページで紹介した私たちの研究や、フィールドワークでの「気づき」などを体験できるマップです。お手持のスマホやPCからGoogleマップのマイマップ機能でご覧いただけます。

□ フィールドワークマップ

『街道をゆく』の「湖西のみち」と「叡山の諸道」を中心に学生たちが、湖西エリアをフィールドワークした地図です。私たちが歩いたルートや、「気づき」のあった場所を写真で見ることができます。

□ 古写真検証マップ

北小松の方々や、大津市歴史博物館からお借りした、1970～1980年ごろの写真と、現在の風景がどのように変わっているかを比較できる地図です。司馬さんが「湖西のみち」や「叡山の諸道」で湖西を訪れた当時の近江を知ることができます。

古い写真と今の景色を比較して、景色の変化から時代の移り変わりを感じました。しかし、北小松や坂本では、司馬さんが訪れたと思われる当時の面影が多く残っていて、司馬さんが好きだった近江を知ることができたような気がしました。



□ 学生たちの『街道をゆく』マップ

特集ページで紹介した、それぞれの研究に関わる場所を示した地図です。冊子では紹介しきれなかった「はっけん！」や、情報を見ることができます。



東京で「はっしん」！

はっけん！学生が語る滋賀・近江の魅力

特集ページで紹介したそれぞれの研究を近江の魅力として2018年12月8日に東京でフォーラムを開催し、発表しました。40名近い参加者を前に、学生たちがプレゼンテーションを行ないました。県外の方に近江の魅力が伝わるか不安もありましたが、「大津絵」のライブドローイングや、伝統漁法の「おいさで漁」の実演など、大いに盛り上がり、たくさんのご意見や感想をいただくことができました。



参加者の感想  
単に自然景観や名所旧跡を紹介するのではなく人々の暮らしと結び付け滋賀の魅力として発信しているところが素晴らしい。学生自身の魅力もプレゼンに反映されていた。

滋賀は行きたくなった！

北小松に凱旋！

ワークショップを開催した北小松でも、自治会の集いにお邪魔して活動の報告を兼ねた発表会を行いました。80名ほどの地元の方々を前に発表するのは、東京とは違った緊張感がありましたが、温かく迎え入れられ、発表後はたくさんの方々から「私たちの町や暮らしを写真や映像に残してくれてありがとう！」と声を掛けていただけました。

司馬さんは、北小松のことを「こんな漁村がふるさとであれば」と書いていますが、私たちの活動において、北小松はふるさとになつたような気がします。



ありがとう！  
感動した！



地図の使い方

[<https://bit.ly/2THsH9E>] もしくは、QRコードからfacebookページをご覧ください。ご使用のデバイス(PC・IOS・Android)に合わせたマップの使い方が掲載されています。



はっけん！近江文化 facebook

【注意】  
・スマホやタブレットでは、Googleマップアプリを最新の状態にご利用下さい。  
・PC・MacからはGoogle Chromeをご利用下さい。(Microsoft EdgeやSafariでは正しく表示されない場合があります。)  
・キヤッシュが溜まりすぎると正しく表示されない場合があります。  
・この地図はレイヤが多いためGoogleマップで表示できません。と出た場合は、画面上に表示される「マイマップで表示する」を選択し、ご利用下さい。





フィールドワークなどの活動をとおりて学生が見つけたさまざまな気づきのほか、本プロジェクトの活動記録を「はっしん！」しています。



フィールドワークなどの活動をとおりて「はっけん！」したさまざまな魅力を研究・調査し、「はっしん！」しています。



私たち「はっけん！近江文化」は、近江の文化や歴史を調べるため、2018年9月から2019年2月にかけて滋賀県湖西エリアでフィールドワークを行ないました。そのなかで見つけたさまざまな魅力のひとつひとつにシャッターを切り、Instagramにて「はっしん！」しています。

「はっけん！近江文化」のインスタグラムにて、「平成近江八景」を含めた近江の魅力的な景観を、たっぷり「はっしん！」しています。

冊子での紹介は一部ですが、

「はっけん！近江文化」のインスタグラムにて、「平成近江八景」を含めた近江の魅力的な景観を、たっぷり「はっしん！」しています。

そんな思いから、加藤の独断で、もっと気軽に近江を訪れてみたいくなる「インスタ映え」というテーマで「平成近江八景」を選定しています。

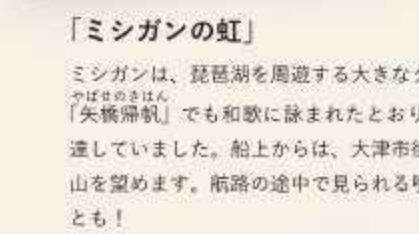
びわ湖南西部では、「近江八景」と呼ばれる美しい景観が見られます。今から500年ほど前に和歌に詠まれたこの景観は、浮世絵に描かれることにより、全国への美しさが広まりました。

人々の手によって今日まで守られてきた近江の美しい景観だけでなく、現代の美しい景観も全国に広めたい！



### 「近江神宮の時雨」

大津宮跡地に建立された天智天皇を祀る神社です。天智天皇が詠んだ句が百人一首の第一番に選出されていることから、「かるたの殿堂」とされています。深い森に包まれているので、しっとりとした雨の日もおすすめ。ここでは袴のレンタルを行なっているため、袴姿で時雨の降る境内を散策すれば、まるで映画のワンシーンのよう。



### 「ミシガンの虹」

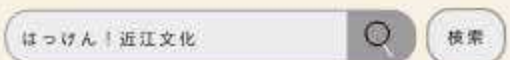
ミシガンは、琵琶湖を周遊する大きなクルーズ船です。近江八景のひとつ「矢橋舟帆」でも和歌に詠まれたとおり、江戸時代には湖上の交通網が発達していました。船上からは、大津市街地の北部に、大きくそびえる比叡山を望めます。航路の途中で見られる噴水には、時折大きな虹がかかることも！



### 「びわ湖バレイの晴天」

標高 1000メートルを超える高さに位置するびわ湖バレイは、眼下に西近江路が走り、びわ湖の対岸には三上山、いわゆる「近江富士」など近江の名所が一望できます。空気が澄んでいれば伊吹山まで見とおせます！

# はっしん！近江文化



いいね！



近江の山々から湧き出た水が川となり、びわ湖へとつながっているように、人々の気持ちや文化もびわ湖へとつながっていました。それは私たちがさまざまな視点から近江の文化を研究し、やがて一つの大きな「はっけん！」となっていく感覚に似ていました。

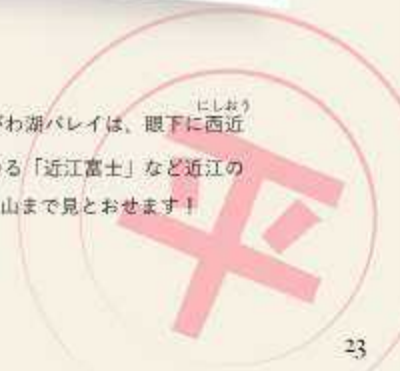
この感覚を映像にするために、時には体を張って撮影をしました。冬のびわ湖での撮影はともかく、冬ですが水の綺麗さが時間を忘れさせてくれ、映像の冒頭にある「楊梅の滝」を撮りに山の奥まで登ったときもその迫力で疲れが吹き飛びました。

美しいびわ湖や人々の暮らす風景には、いろんな文化の魅力があるということ。「はっけん！」していただければ幸いです。

（竹間優大）



北小松の方々と交流しながら近江の文化に触れるワークショップやフィールドワークの様子を映像にしYouTubeで「はっしん！」しています。



# あとがき

かつて、学生たちは本を片手に旅をしていました。沢木耕太郎の『深夜特急』シリーズや内田百閒の『阿房列車』シリーズなど。もちろん、司馬さんの『街道をゆく』も学生だった私にとって旅のバイブルでした。

今回、司馬さんの小説から近江の魅力を発見・発信するという取組みを聞いたとき、私は再び「街道をゆく」を片手に今の学生たちと旅をしたいと思いました。

この企画をはじめる前に、司馬さんの「街道をゆく」を知っているか？と数名の学生に聞いてみましたが、名前は知っているという学生がちらほらいるだけでした。

今の学生たちが司馬さんや近江のなにに魅力を感じ、なにを発信したいと思うのか？という私の興味がこの企画のはじまりです。

この冊子は学生たちが「街道をゆく」にならない、近江を旅した記録です。

「滋賀県にはびわ湖しかない！」と考えていた学生たちが、近江の文化から、さまざまな魅力を「はっけん！」しました。

学生たちの視点や経験を、この冊子を手にした方々に体験していただければ幸いです。

「はっけん」

翠織奈

はっけん「近江文化」プロジェクト 企画・監修

読者作家・ワークショップデザイナー

成安造形大学芸術学部 非常勤講師

## あわじ

— 学生たちの「街道をゆく」 —

発行日 2019年3月29日

発行者 滋賀県

編集 成安造形大学 地域連携推進センター  
「はっけん」近江文化」プロジェクト

企画・監修 翠織奈

アシスタント 長谷川瑠夏

アートディレクション 井上実奈美 岩佐南実

タイトルデザイン 今村空歌

文 井上実奈美 翠織奈

イラスト 富田真央

写真 加藤あゆ 翠織奈 長谷川瑠夏

特集ページ担当 井上実奈美 今村空歌 岩佐南実 富田真央

地図ページ担当 池見善矢

SNS ページ担当 加藤あゆ

マップアイコンデザイン・動画ページ担当 竹間優大

協力 公益財団法人司馬遼太郎記念財団

取材協力	ロケーション協力
大津絵の店	近江神宮
大津市北小松自治会	海門山満月寺
大津市歴史博物館	高嶽山興聖寺
聖田漁業協同組合	白鷺神社
生水の郷委員会	藤樹書院
琵琶湖汽船株式会社	長等山園城寺
びわ湖パレイ株式会社	日吉大社
UDS 株式会社	比叡山延暦寺

スペシャルサンクス 加藤賢治 上野由利 沼津早百合 金光彩花 竹ノ内花菜 西岡吉子 三島千明 遠藤晴彦 成安造形大学メディアセンター

成安造形大学 地域連携推進センター  
大学の基本理念「芸術による社会への貢献」を具現化し、地域・社会・企業と学生をつなぐ架け橋となることを目的に、さまざまな連携プロジェクトを推進しています。

参考文献 司馬遼太郎 (1971). 街道をゆく 1 湖西のみち. 甲州街道. 長州路ほか. 朝日新聞出版  
司馬遼太郎 (1981). 街道をゆく 16 叡山の悠遊. 朝日新聞出版  
司馬遼太郎 (1984). 街道をゆく 24 近江散歩. 奈良散歩. 朝日新聞出版  
司馬遼太郎 (1999). 対談集 日本人への遺言. 朝日新聞出版